

学生が描く石川町の未来

造園・建築学ぶ14大学の48人ら報告会

京都大、千葉大、東京農大、日大工学部など14大学で学ぶ造園家や建築家のタマゴが石川町を現地調査し、町の将来像を提案する報告会が16日にあった。加納武夫町長は「自然環境や人、資源に恵まれ、福島県の手本となる町だ。考えていた通りの提案があり感激だ。学生さんたちには、ぜひ永住してもらいたい」と語った。

現地を歩いて調査

町長感激「永住を」

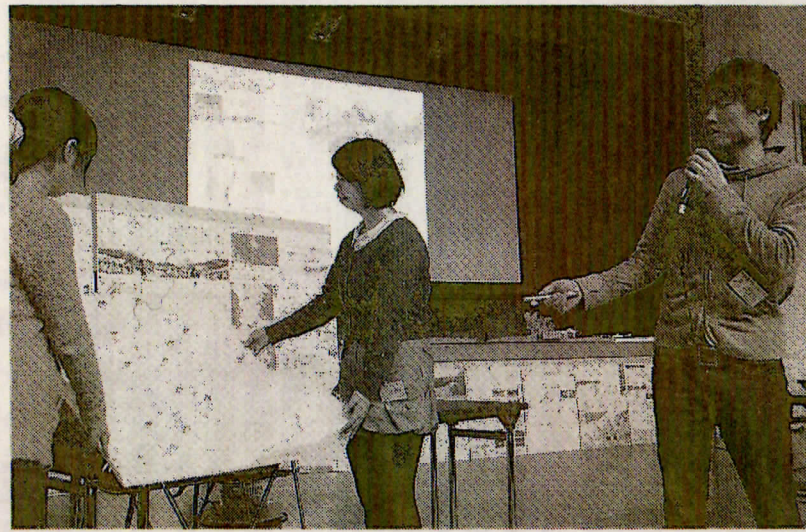
造園、建築学を学ぶ学生を対象に日本造園学会関東支部が主催している学生デザインワークショップで、今年で8回目。「国内でもっとも問題になっている福島県を舞台に選ぶべきだ」との声が出て、東北支部や町内の造園業、仲田茂司さん(55)に相談。石川町が舞台となった。学生48人に指導者、運営スタッフら総勢70人が参加した。

東京電力福島第一原発からの距離が近いのに放射線量が低く、桜の名所、鉱物資源、温泉といった天然資源に恵まれ、農業が盛ん。古い歴史を有し、伝説もあ

る。学生たちは8月中旬に2泊3日で町中を歩いて調査し、住民から聞き取り、今後のまちづくりの可能性を探った

歴史的、地理的な背景から、石川郷(市街地)、長田郷(中田地区)、藤田郷(野木沢地区)の3地区に分け、各地区2班、計6案の提案がまとまった。班ごとに2人、第一線で活躍している建設会社や建築事務所の設計者、デザイナーが助言、指導にあたった。

「復興の担い手として、避難者の受け皿となり、仮のまちがゴーストタウン化しないよう、農業や自然を



模型とスライドを用いて、復興の担い手として被災者を受け入れ、町の活性化につなげる提案をする学生たち

都市はじめ3カ所で報告会を開いており、企画自体が風評被害対策の効果も果たしてきた。

仲田さんは「レベルの高さにも驚いたが、手弁当で何百時間もかけて調査を続け、原発事故からの復興や風評被害克服に取り組んでくれた学生たちの熱意に感激した」と話した。

(西村隆次)

■学生たちが提案した町の将来像

「新しい受け皿としての石川郷」
避難者にとって住みやすい多様な住環境を整え、避難者を受け入れることで町発展の基礎にする

「強固な産業の創出」
農業生産物の集積、加工販売でブランド化、地形と町屋型住宅を情報発信。集客機能を付与し6次化産業の拠点にする

「O×1000=O」
千年単位で山との関わりを考える。山単位、山街区として村で共有、山の価値を高める

「SAKURA×CORRIDOR」
東京と福島をつなぐ鉄塔と送電線に注目。未来に進もうという人々の姿をサクラ・コリドー(桜回廊)で表現する

「藤田GO!!〜ウチさ、くっか」
町と都市生活者がともに暮らし、共同作業を通じて信頼関係を結び、支え合う関係を築く

「ぐるりと藤田郷」
ビクターセンターを中心に河岸段丘の豊かな景観と、鉱物を利用したオブジェを配して郷全体を博物館化

避難者受け入れ／鉄塔と送電線に注目／郷全体を博物館化

現地調査の後も継続調査のために町に泊まり込み、交流を続けた学生たちもいる。加納町長が「家族も同然だ」と話すほどだ。

関東支部の担当者は「このワークショップの一つの完成形を見た思いで、感激している」と評価した。

この日の報告会の前に京